



【主日礼拝説教】 2018年6月3日

説教題 光と闇との行き交う所

聖書 ヨハネによる福音書 12章35～43節

ヨブ記 24章13～17節

説教 武田 真治

一、光か、闇か。

この説教の後に歌います讃美歌は511番です。その一番の歌詞は「光と闇とが 戦うこの世、正義と不義とが 争うところ。今こそわれらの 決断の時、ためらいひるむな、悔いを残すな。」です。しかし、同じ歌が以前の『讃美歌一編』では276番に納められています。その歌詞は「ひかりとやみとの ゆきかうちまた、いずれのかたにか つくべきわが身、燃えたついのちを みまえにささげ、今しも行かばや、まことの道を。」でした。かなり歌詞が大きく変更されていることが分かります。なぜそうなったのか、その理由はよく分かりません。単に文語体を口語体に直ただけではなさそうです。比べて読む時に『讃美歌21』の方はいかにも勇ましい感じがしますが、『讃美歌一編』の方がより深くこの世の光と闇の両方の存在を捕え、その両者の間で「いずれのかたにか(=どちらの方に)つくべきわが身(=自分は従うべきだろうか)」と、闇に引きずられてしまう人間の弱さもちゃんと見ていると思います。そしてその上で、この世の闇にひきずり込まれないためにも光の方へと「今しもいかばや(=今こそ行こうよ)まことの道を(=真の信仰への道へと)」と歩み出そうとしている言葉になっています。『讃美歌21』の歌詞では、この世の光と闇の戦いを単に「正義と不義との争い」だけに捉えている点は表層的で政治的だと思うのですが。

私たちの生きているこの現代は、表面的には平和で豊かな顔をしています。その表皮を一枚めくればとたんに深い闇が顔を見せて来る社会ではないかと思えます。昨週起こった女性誘拐事件も、それまで顔も知らなかった者たちが闇サイトを通じて知り合い恐ろしい凶行に走ったのでした。誰もが、ちょっとしたことでこの世の闇に引きずり込まれてしまう危うさがあります。このような状況下で、闇の存在を否定し、あたかも闇は存在しないと考えることは、現実を直視しない勝手な甘い見通しに陥ってしまうと。それだけでなく罪や悪に目を止めなくなるために、実はとても危ない生き方になります。信仰に生きる者こそそのような危険に陥らないように気を付ける必要があると思っています。

二、「光のあるうちに」

今日の聖書の箇所イエス様は私たちに「光は、いましばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。」と教えて下さいます。

イエス様は「暗闇」の存在を否定しておられません。むしろ「光」の存在の方が「いましばらく」の存在であり、いつか遠ざかってしまう存在であると。それ故に「暗闇」が「追いつこう」としているときまで言われます。もちろん、このイエス様の言葉はこの後に続くイエス様の十字架上での死を想定しながら語っておられるものでしょう。





その意味では、イエス様の復活後に生きている今の私たちにとっては、天より絶えず豊かにイエス様が「光」を注いで下さっている素晴らしい状態にあると言い得るでしょう。であるならば、もう暗闇はすべて駆逐され、光だけが輝いている世の中になっているのでしょうか。そうはなっていません。依然として「光」が必要です。むしろ、光が注がれることを待っている「暗闇」がたくさん存在しているのが今の世です。

イエス様が復活された後に生きる私たちにとっても「光のあるうちに、光を信じる」ことが必要なことは次のようにも言い得ます。私たちはすべていつかこの世での生活を終る時＝死が来るからです。「死」の時はまさに私たちの目が閉じられて「暗闇となる」からです。まさに「死」という「暗闇」が私たちを飲みこもうとしている現実があります。その死という暗闇を打ち払うためには《復活への信仰と希望に生きる》こと以外に私たちには方法がありません。そのような復活信仰こそ私たちにとっての「光」です。この光の中を歩いて行くことで「暗闇に追いつかれない」ように生きていけるのではないのでしょうか。

### 三、暗闇の中を歩く者は

では、なぜ更に私たちは「暗闇に追いつかれる」ことを恐れなければならないのでしょうか？ もはや死を駆逐して下さったのではないのでしょうか？

イエス様は「暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。」とされています。暗闇に囲まれた者は前後不覚に陥ってしまい、自分の行くべき道が見えなくなるからということです。それは、闇夜の中で懐中電灯も持たずに道に行くようなことでしょう。自分が歩いている道が正しいのか、間違っているのか分からない、目の前に大きな穴が空いているとしても、見えなくて落ちて命を亡くすという危険もあります。まさにそこに立ち尽くしてしまうしかない状態ではないかと。そのままでは復活に達することが出来なくなるのです。

確かに、真っ暗な状態であると自分の姿さえ見えなくなります。そうであれば、どれが自分の行くべき道なのか、自分にふさわしい道なのか、どうして正しい判断が下せるでしょうか。自分がどこにいるかささえ分からないのに。それでもなんとかしようとして、あれこれと手当たりしだいに手を伸ばし、最後にはどうにでもなれと歩き始めると必ずと言っていいほど失敗をします。痛い目に会い、命さえ危険にさらします。それが「光」を見失っている状態です。

旧約聖書で「滅びる」と訳されている言葉はいくつかありますが、最も多く用いられている言葉は「アーバド」です。この言葉の元々の意味は「さまよう、失せ去る」で（放任されてどこかへ行ってしまう）ことを表します。聖書で言う「滅びる」ということは、何か神様がその存在に手を下して滅ぼし尽くされるということ（その意味を表す言葉もありますが）よりも、自分勝手に好きな道を行ってしまい、その結果、迷い、失敗して滅んでしまうことの方がはるかに多いのです。私たちで言えば「もう放って置いてくれ」と親や友達やそして神様に対して言い渡して自分の好き勝手な道を歩いて行くことでしょう。その結果どうなるか、多くの場合うまく運ばず、結局は助けを求めることになります。でも、そこで誰も助けられなければ、後は「滅びる」だけだということになるのです。まさにそれが「暗闇の中を歩く者」の末路だということでしょう。自分が可愛い、自分を大事にしたいと自分の思う通りに生きた結果、逆に道を見失い、自分を見失う経験は私たちでも覚えがあります。「私は何をして来たのか、こ





れが私の求めて来たものなのか」と絶望してしまった経験が。

自分がどこにいるのか、自分がどこに向かっているのか、そもそも自分が何者なのかが見えない状態にあることこそ「暗闇の中」にいる状態なのだとイエス様は言われます。自分は大丈夫だ、すべて分かっていると思っている時こそ、実は自分の状況さえ認識していないで、自分でそう思い込んでいるだけで、本当は暗闇の中にどっぷり浸かっている状態かもしれないのです。それが光に照らされていない状態なのです。

#### 四、光の子となるために

それ故、イエス様は「光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。」とされています。闇から出るためには、真の「光」であるイエス様を信じる他ないのだと。この言葉は、そうしないと本当に危ないが故に敢えて〈命令〉の形を取っておられます。それほど切実だからです。

イエス様につながることによって、私たちも《復活に預かるようになる＝光の子となる》ことをだと言い得ます。そのためにはまず何より自分の中や周りにある「暗闇」をちゃんと認めることから始まります。

聖書が「罪」ということを語っていることは、まさに私たちに「自分をちゃんと見なさい。見えるようになりなさい」ということでしょう。それは自分の中にある闇に気付くということでしょう。これを認めることは辛さも伴いますが、しかし自分が見えるようになれば、周りの闇にも気付くことが出来ます。そうすればそこからなんとかして抜け出そうとするはずです。自分の力だけでは無理なことも、イエス様の赦しと励ましの言葉を支えにして、その助けと導きによって「光の中へ」と歩み出すのです。そして私たちが「どこへ行くのか」も実はとても明らかです。イエス様のみ許（＝み国）へと向かうのです。そのみ国で蘇る時こそ完全に《光に包まれる時》だと言い得ます。もはやそこには影も闇もなくなるのです。それがここでイエス様が仰っておられる「光の子となる」の究極の意味でしょう。そのためにも「光のあるうちに、光を信じなさい。」と招かれているのです！

(礼拝説教より抜粋)

